



★歌のメモリー 回想五十首選
「山中智恵子」

選・文 林 和清 (玲瓏) 選者

Kazukiyo Hayashi

葡萄は皿にその深き海の酒のいろ記号の論理ここに静かなり
【空間格子】

うつしみに何の矜持ぞあかあかと蠟座は西に尾をしづめゆく

声しぼる蟬は背後に翳りつつ鎮石のごとく手紙もちゆく
【紡錘】

水甕の空ひびきあふ夏つばめものにつかざるこゑごゑやさし

いづくより生れ降る雪運河ゆきわれらに薄きたましひの鞘

絲とんぼわが骨くぐりひとときのいのちかげりぬ夏の心に

日ののちの秘色青磁を瞻りゐつころほろほすことばを生きて

一枚の硝子かがやき樹を距つむしろひとに捨てしは心

行きて負ふかなしみぞこ鳥髪に雪降るさらば明日も降りなむ
【みずかありなむ】

さくらばな陽に泡立つを目守りゐるこの冥き遊星に人と生れて

その問ひを負へよ夕日に降ちゆき幻日のごと青旗なびく

三輪山の背後より不可思議の月立てりはじめに月と呼びしひとはや

わが額に時じくの雪ふるものは魚とよばれてあふるるイエス

春さむき鳥住はいづこ かかる日を活ける水もちてひとは歩むか

【やまなか・ちえこ】 大正十四年
愛知県名古屋出身。十代より作
歌を始め、前川佐美雄「うれなる」
と出会い短歌開眼。戦後になり前
川門下に入る。昭和三十二年「空
間格子」上梓。塚本邦雄らを知り
前衛短歌運動に参加。のち村上
一郎の影響の下、古代的な作風に変
化。「巫女」と呼ばれる。昭和六十
九年追空賞受賞。平成十八年三月
九日没。享年八十一。

水くぐる青き扇をわがことば創りたまへるわが夜へ献る

まこと薄き臉と思へ一日の秋のくだものかかげゆくかな

星涵す庭をたまひて遂げざれば文章のこといづれ寂寞

岩の上に魚解かれをり昼顔の海の石垣昏れそめにけり

ただよひてその掌に死ねといひしかば虚空日月夢遂きかも

星空のはてより木の葉降りしきり夢にも人の立ちつくすかな

六連星すばるみすまるプレアデス 草の星ともよびてはかなき

風 凧風と記しゆき天なるもののかたちさびしき

夏の声澄みてわたれば人のなか鳥獣くらく立ち隔つらむ

たたかひはいづこの辻の祭ぞとをとめらいひてすべなかりけり

はてしなき時代の雨期に文章の暗かなること狂といはむか

きみなくて今年の扇さびしかり白き扇はなかぞらに捨つ

ひとなくてひぐらしをきく夕ごろあるかなきかに生きてあらむか

そのひとをしらずといひて空にあふ飛燕の群のうるはしきかな

この世にぞ駆てふありてひとふたりあひにしものをみずかなりなむ

ひぐらしにさびしき顔をとり落し増の面を恋ふべくなりぬ

閉ぢわたるいのちいのちの量ありて狂院の朝に火を焚く男

未然より未亡にいたるかなしみの骨にひびきてひとはなきかな

〔虚空日月〕

〔青章〕

〔短歌行〕

〔星醒記〕

〔星肆〕

〔神末〕

天才であり奇人であること

二十五年以上も前のこと、「日本歌人」の浅川肇さんの知遇を得て、中山さんの最新歌集『鶴鶴界』の書評を書いてほしい、という依頼を受けた。まだ現代短歌の世界に入ったばかりで、評論を書いたことのない私は、あまりの荷の重さにかなり参った。そんな折、「ヤマユ」の方の記念会で、はじめて前登志夫さんとお会いする機会にめぐまれた。書評を書きあぐねていることを告げると、前さんはたちどころに、「山中智恵子の歌は、あれは○○や。みんな○○の歌や。」と一刀両断された。伏字の部分は書くのが遠慮される卑猥な言葉だった。察していただきたい。

そこから山中短歌の秘密がするすると解明できたよう、で、鶴鶴の意味するものもわかり、なんとか書き上げた。そのご縁からか、大変よくしていただいた。といっても、尋常ならざる詩魂をもつ大女流歌人のこと。世俗的な慣れ親しみは一切なし。お会いするとわたしは何か少しでもお話ししたい、と一生懸命になるのだが、

幻想の祖国を視たり夢のなかに天皇退位あたたためゆかむ

『喝食天』

はるばると人恋はむためすも食む桃もすももわびしきものを

われらいま自由を病むを夏椿あしたに咲きてゆふべこぼるる

『鶴鴛界』

短歌への最短距離を生きてきてとほく日常をとほざかりぬる

『夢之記』

雨師として祀り棄てなむ葬り日のすめらみことに氷雨降りたり

青人草あまた殺してしづまりし天皇制の終を視なむ

天皇制の無化ののちわが死なむかな国栖奏の邑過ぎて思ほゆ

歌はこころを超えゆくくらむかあかときの楽欲として一さじの蜜

思ひきり心をつかみ出せるを拉鬼といふか すさべむらぎも

虚鬼ひとり歩みてゆききあれはわが昨日のいまのぬげがらなりし

『黒翁』

父もまた遊戯人 帝國の深夜を病みてもの狂ひたり

ロゴズこのいつくしきものもたらして蛇ありここに月山は顕つ

『風騷思女集』

くれなるの雨降るこころ夜半のゆめ老いにけらしも 老いざらめやも

玉蜻夕日にむきてこととへば焚きあましたる恋もあるべし

『玉蜻』

廃墟に降りし朝の雪はも 自由の雨降りし夜はも 忘れずあれよ

『玉菱鎖石』

くれなるは深みゆくかもひとときを水想観の合歡の睫毛や

『玲瓏之記』

一生われアンドロギュノス負ひたりしこの矜恃ありて羞しも

未刊歌集『青扇』

星は医師と誰か言ひけむ こはれゆく銀河を仰ぎとどめむものを

山中さんは二言三言、小さな声で答える。とすぐにその場を離れられる。わたしの出版記念会にも出席してくださり、祝辞がわりに一首献詠していただいたのだが、それが「地獄」という言葉の入った、普通は祝辞にならない歌だった。またそれが光栄で涙ぐむほどうれしかった。

山中短歌は、古代神々の声を聴く巫女的な世界だとよく言われる。たしかに『みずかありなむ』以降は、意識的に古代的な主題を選択し、日本の劫初世界に降りてゆくような作品を展開している。主知的なテーゼを歌いながら、下の句でふつと意味からのがれて呪文のように言葉がつかまれる。読者はそのとき、歌意を追求することを断念して、日本語の美しさが最高度に発揮されその調べに陶酔感をおぼえるのが常である。

しかし、散文を読むと、意外なほど硬質な文体に驚かされる。論点も明晰で揺るぎがない。ふと、山中さんはどういう人だったのだろうか、と考える。にわかにとらえがたいのは当然として、ひとつだけ言えるのは、天才と奇人がニア・イコールであった時代の人だということである。